

問1 自治体が作成する、地域の避難場所や自然災害の被害想定を示した地図資料を活用する目的として、最も適切な説明はどれですか。 (2017年 京都公立入試 類似)

1. 事前に被害が予想される区域や避難先を把握し、実際の災害時に迅速な避難行動に結びつけるため
2. 日本のおもな年中行事の時期を確認し、地域の伝統行事への参加を促して文化を継承するため
3. 日本銀行の金融政策による景気変動の情報を得て、地域の企業が投資計画を立てる際の参考にするため
4. 等高線から傾斜の緩急を読み取り、道路の建設や宅地造成を行う際の最適な場所を特定するため

問2 日本の気候区分のうち、冬の12月や1月の降水量が200ミリを超えてピークを迎え、夏季よりも冬季の降水量が多いという特徴を持つ地域の名称として適切なものはどれですか。 (2025年 栃木公立入試 類似)

1. 日本海側の気候
2. 太平洋側の気候
3. 瀬戸内の気候
4. 中央高地の気候

問3 中部地方を北流して長野県から新潟県へと流れ、日本海に注ぐ全長約367kmの河川の名前として正しいものを、次の中から選びなさい。 (2017年 長崎県公立入試 類似)

1. 信濃川
2. 利根川
3. 石狩川
4. 木曾川

問4 東北地方の太平洋側で、冷たく湿った性質を持つ「やませ」が夏の長期間にわたって吹き続けた場合に懸念される、農業への影響として最も適切なものはどれですか。 (2024年 高知公立入試 類似)

1. 気温が上がらず日照時間が不足することで、稲などが十分に育たない冷害が発生する。
2. 乾燥した強い風が山を越えて吹き下ろすことで、田畑の水分が奪われ深刻な干ばつが発生する。
3. 海からの強い風が海水を内陸まで運ぶことで、農作物の葉や茎が枯れてしまう塩害が発生する。
4. 南風の影響で急激に気温が上昇し、農作物がしおれてしまう高温障害が発生する。

問5 地形図から河川の流れる向きや上流・下流を判断する際、等高線と標高の関係について述べたものとして正しいものはどれですか。 (2020年 三重公立入試 類似)

1. 等高線が示す標高の数値が大きい地点ほど、河川の上流側に位置している。
2. 等高線の密度が高い(間隔が狭い)地点ほど、河川の最下流に近い平地である。
3. 河川は常に等高線に対して並行に流れる性質を持っており、標高の変化は関係ない。
4. 等高線の数値が示すのは森林の高さであるため、河川の流向を判断する材料にはならない。

問6 等高線が山地から平地へ向かって扇形に広がっている「信濃小倉」付近のような地形で、土地利用として果樹園が多く見られる理由について、適切な説明はどれか。 (2017年 茨城県公立入試 類似)

1. 堆積した土砂の粒が大きく、水が地下に浸透しやすいため水持ちが悪いから
2. 標高が周辺の平地よりも著しく高く、冷涼な気候が稲作に適さないから
3. 川の河口付近に位置しており、満潮時の塩害の影響を避ける必要があるから
4. 火山灰が厚く堆積してできた土地であり、養分が乏しく水田には不向きだから

問7 過去に発生した地震、津波、洪水などの災害情報を後世に伝えるために設置された石碑であり、2019年には国土地理院によって、石碑を模した形の中に縦線が入った図形の地図記号が新たに制定されたものを何と呼ぶか。 (2023年 鳥取公立入試 類似)

1. 自然災害伝承碑
2. 戦災復興記念碑
3. 万葉歌碑
4. 忠魂碑

問8 群馬県沼田市のような内陸に位置する都市の雨湿図に見られる特徴と、その要因について述べた文として正しいものはどれですか。 (2018年 京都公立入試 類似)

1. 海から離れているため水の熱容量の影響を受けにくく、夏と冬の気温差が大きくなり、年間の降水量は比較的少なくなる
2. 黒潮などの暖流の影響を強く受けるため、冬でも気温が下がりにくく、年間を通じて降水量が多くなる
3. 標高が低く平坦な土地であるため、季節風の影響を直接受けやすく、一年中湿度の高い天候が続く
4. 冬季に北西の季節風が山を越えて吹き下ろす「からっ風」の影響で、冬の降水量が夏季を上回る

問9 日本の瀬戸内地方において、年間を通じて降水量が少なく、乾燥した晴天の日が多い理由として、地形と風の関係から説明したものとして最も適切なものはどれですか。 (2018年 岐阜公立入試 類似)

1. 夏は四国山地、冬は中国山地によって、湿り気を含んだ季節風が遮られるため
2. 一年中、大陸から吹きつける偏西風が、中国山地を越える際に雨を降らせるため
3. 夏に小笠原高気圧から吹き出す貿易風が、四国山地を越えて乾いた風になるため
4. 冬に北から吹く冷たい季節風が、日本海を渡る際に水分をすべて失ってしまうため

答え合わせ・解説

問1	答え 1 事前に被害が予想される区域や避難先を把握し、実際の災害時に迅速な避難行動に結びつけるため	自然災害は突発的に発生するため、平常時から自宅周辺の危険度や避難ルートを認識しておくことが「減災（被害を最小限に抑えること）」につながります。選択肢にある年中行事や金融政策の資料は、防災・安全を目的とした地図資料の役割とは異なります。ハザードマップは住民の命を守るための具体的な行動指針として機能します。
問2	答え 1 日本海側の気候	冬に降水量（降雪量）が多くなるのは、シベリア高気圧から吹き出す北西の季節風が、日本海を渡る際に暖流の対馬海流から水蒸気を蓄え、日本の背骨にあたる山脈にぶつかって上昇気流を発生させるためです。これにより、日本海側の地域では冬に雪や雨が多くなり、山を越えた太平洋側では乾燥した晴天が続くという対照的な天候が見られます。
問3	答え 1 信濃川	長野県内では千曲川と呼ばれ、新潟県に入ると名前を変えるこの河川は、日本で最も全長が長い河川です。河口付近には日本有数の米の産地である越後平野が広がっています。日本で最も流域面積が広い利根川（関東地方）や、3番目に長い石狩川（北海道）と混同しないよう注意が必要です。
問4	答え 1 気温が上がらず日照時間が不足することで、稲などが十分に育たない冷害が発生する。	やませはオホーツク海高気圧から吹き出す冷涼な風であるため、発生すると東北地方の太平洋側では気温が平年より大幅に低くなります。特に開花期や実が育つ時期の稲にとって、この低温と日照不足は致命的なダメージとなり、収穫量が著しく減少する「冷害」を引き起こします。かつては飢饉の原因にもなった、日本の農業において警戒すべき気象現象の一つです。
問5	答え 1 等高線が示す標高の数値が大きい地点ほど、河川の上流側に位置している。	等高線は海拔（標高）が等しい地点を結んだ線であり、地形の起伏を表現しています。水は高いところから低いところへと流れるため、河川に沿って標高を比較した際、数値が大きい（高い）地点が上流、数値が小さい（低い）地点が下流となります。このように、地形図読解では等高線から得られる高度情報が流向判定の決定的な根拠となります。
問6	答え 1 堆積した土砂の粒が大きく、水が地下に浸透しやすいため水持ちが悪いから	扇状地、特にその中央部である「扇尖（せんおう）」では、川が運んできた砂や礫（小石）などの比較的大きな粒の土砂が堆積しています。そのため、表面を流れる水が地下に染み込みやすく、水田に必要な水を貯めることが困難です。この「水はけの良さ」を活かし、古くからブドウやモモなどの果樹園として利用されてきました。これに対し、川が海や湖に流れ込む場所にできる三角州は泥などの細かな粒が堆積するため、水持ちが良く水田に利用されます。
問7	答え 1 自然災害伝承碑	過去の災害の教訓を風化させず、地域住民の防災意識を高めることを目的として設置されている。地形図にその位置を表示することで、自分たちが住んでいる場所ですべてどのような被害があったのかを容易に確認できるようになり、適切な避難行動につなげる狙いがある。
問8	答え 1 海から離れているため水の熱容量の影響を受けにくく、夏と冬の気温差が大きくなり、年間の降水量は比較的少なくなる	内陸の気候（中央高地の気候）は、海から遠く離れていることが最大の特徴です。水に比べて温まりやすく冷めやすい陸地の性質により、夏は非常に暑く、冬は冷え込みが厳しくなるため、気温の年較差が大きくなります。また、周囲を山々に囲まれているため、水分を含んだ風が入りにくく、海岸沿いの地域に比べて年間の降水量が少なくなる傾向があります。
問9	答え 1 夏は四国山地、冬は中国山地によって、湿り気を含んだ季節風が遮られるため	季節風は高い山地を越える際、風上の斜面で雨や雪を降らせるため、山を越えた後には乾燥した空気となります。瀬戸内地方は北側を中国山地、南側を四国山地に挟まれているため、夏と冬どちらの季節風も山地によって湿り気が遮られ、降水量が少なく乾燥した気候になります。